



歴史都市・大阪の背骨に当たる上町台地をフィールドに、2013年秋から2024年春にかけて、約10年にわたり20号を編集・発行した『上町台地今昔タイムズ』。過去との対話を通し、現在を見つめ直し、未来へつなぐ歴史実践として、改めて共有したい観点を取り上げてレビューする。

はじめに
— 四天王寺門前の物語から —

前回、本連載第3回では「四天王寺から紐解く、遍く救済・再生の物語」をテーマに、『上町台地今昔タイムズ』（以下、今昔タイムズ〔*1〕）Vol.18と、『上町台地今昔タイムズ Vol.18 Document』〔*2〕にフォーカス。受難と再生の物語の舞台として、数々の戦火や災害に見舞われながらもその都度よみがえり、

時代とともに変化しながら人々の心とともにあり続けた、救済・包摂の場、アジールとしての四天王寺の姿を見つめた。

とりわけ、中世の民衆の語り芸能・説経節の代表作のいくつかに描かれた、四天王寺門前で繰り広げられる哀話と救いの物語。苦しい境遇から光の指す方向へ人生が転換する、象徴的な場面に注目した。その一つ「しんとく丸」〔*3〕は、河内国の「高安長

者伝説」をもとにつくられたものだが、同じ伝説に依り室町時代に生まれた能の演目に「弱法師（よろぼし）」がある。説経節の「しんとく丸」と

違い、能の「弱法師」は四天王寺の門前に舞台を絞っている。盲目の物乞いとなった俊徳丸が、極楽の東門と呼ばれる西門・石の鳥居の中に沈む夕陽を拝み、西方浄土を想念する、日想観の情景をうたい上げ、春の彼岸の救いの物語へ昇華する、600年以上の

時を超えて生き続けている名作だ。また、近世には浄瑠璃・歌舞伎の俊徳丸と継母の物語「撰州合邦辻」も生まれ、今も人気を博している。

時代はさらに下って、同じ伝説の源流に遡って創作された短編小説に、折口信夫（おくりぐちしのぶ、1887-1953、以下折口）の『身毒丸（しんとくまる）』（1917年）がある。田薬法師の子・身毒丸が、業病の宿命を背負いながら、田楽一座の一員として旅する暮らしの中に、古代以来の芸能文化を描いている。

折口は、国文学と民俗学を独自の感性で結びつけ、過去と現在をつなぐ古代学を切り拓いた、日本の近代を代表する学者の一人であるとともに、異能の芸術家でもあった。自らの研究成果に基づく小説を書き、学問と社会を接続することを試みた。また、釋道空の名も持ち、歌人や詩人として自らの思想に根差す作品を数多く世に問うた。けれど、折口学とも称されるコスモロジーの原点が、大阪・上町台地にあったことは、一般には

意外に知られておらず、残念なことに故郷・大阪ではほとんど忘れ去られている。

今回、連載第4回（最終回）では、「かの国文・民俗学者にして歌人 折口信夫」釋道空を生んだ「野生」の都市・大阪と上町台地をゆく」をテーマに、折口の大坂での歩みを追った、今昔タイムズ Vol.19（図1・図4）を中心として、折口学を生んだ大坂のコスモロジーを見つめ、その風景の先に未来を想観したい。

「野生を帯びた都會生活」という言葉が意味すること

大阪の歴史・地理的特性と不可分で形成されてきた、大阪の気風の核心を突くものと思われる「野生を帯びた都會生活」という言葉。大阪出身の折口自身による大阪評であることを、筆者が初めて知ったのは、2017年9月、大阪のまちのお地藏さんと地藏盆について、大阪民俗学研究会代表の田野登氏に講演いただいた、上町台地今昔タイムズ Vol.18〔*4〕でのこ

とだった。

田野氏は、大阪のまちのあちこちで盛んに行われている地藏盆と、地藏の前で繰り広げられる踊りの風景に、大阪人のDNAともいえるべき民俗を感じ、ある種の野性味と捉え、民俗学の先達・折口の言葉を引き合いに出された。しかし、折口がこの言葉に込めた本心はどこにあるのか、はたまた折口学の原点がそこにあるのかもしれない、そんな

な想いを抱き、筆者はその言葉を中心に留め温めてきた。やがて巡ってきた折口の没後70年・2023年に満を持し、今昔タイムズ Vol.19

で折口をフィーチャーし、改めて「野生」の都市・大阪と折口信夫」について、田野氏の視点で解説いただいた。折口が大阪について「野生を帯びた都會生活」という表現を用いたのは、アララギ派の歌人・斎藤茂吉（以下、茂吉）

との誌面上での手紙のやりとりでのこと〔*5〕。古今和歌集以降の繊細な歌風「たおやめぶり」に対して、万葉集に見られるおおらかな歌風「ますらおぶり」の復活を目指すアララギの運動に向けて、万葉を愛する折口が自らの思いの丈を切々と説いているものだ。

田野氏は、この手紙の中で折口が、東北出身の茂吉こそ「力の藝術家」にふさわしい



図1 『上町台地 今昔タイムズ』Vol.19 (2023年 春夏秋冬号) 1面。左の二次元コードから、紙面の閲覧ができる。

「ますらおぶり」の資質の持ち主であり、「田舎に生まれ育ったことは非常な祝福」なのだと称賛したうえで、「大阪は、二代目、三代目の家が絶え、つねに新興の気分を保ち続けており、『野性』を帯びた都會生活、洗練せられざる趣味を持ち続け、そのため『比較的野性の多い大阪人が、都會文藝を作り上げる可能性を多く持つてゐるかも知れません」と、大阪人による『都會文藝』の可能性を主張し、都會性と野性が複合する大阪の風土に創造の源泉を見出していることに注目している。

もう一点、田野氏が強い関心に向けているのが、折口が芸能者に向ける深いまなざしの中にある「野性」である。田野氏は次のように解説する。「大阪の野性の『発見』は、少年折口を育んだ大阪南郊を歩き交う、実にさまざまな境遇や階層の人々、細民の姿に對してでした。（中略）折口自身、子どもの頃から慣れ親しんだ、門付け芸人、大道芸人たちの存在がそうです（図2）。



図2 「大阪に薄れ行く節分情景」として、郷土雑誌『上方』38号（1934年2月号）に掲載された絵。右端の人物が「厄払い」で、「節分の夜、戸締りをした表に立つて『ヤツク拂ひませう』と訪れた」との説明がある。



図3『撰津名所図会』(1796年)から、「撰州合邦辻」の舞台として知られる「合法辻・焰魔堂」界隈の様子。近景には間魔大王と地蔵の前で祭りの日に子らが縄で道行く人を留めて銭を乞う風俗が、遠景には茶白山や一心寺や相坂(逢坂)清水が描かれている(大阪市立図書館デジタルアーカイブより)。

津西(丁目)に生まれた。代々医院と薬種屋を営む家で、雑貨も商っていた。父・秀太郎を通して、折口は幼い頃から万葉集や百人一首などを口伝に習い、和歌に親しんで育った。小学校時代には、お遣いのお駄賃を握りしめ、道頓堀や千日前に向かい、芝居に夢中になった。中学生になると、

文芸サロンの様相を呈す心齋橋筋の書店・金尾文淵堂に足しげく通い、文学を志す若者たちの空気に触れ、薄田泣菫の第1詩集『暮笛集』や、与謝野鉄幹・晶子も寄稿していた雑誌『小天地』などに、心をときめかせていた。

12歳で入学した大阪府立第五中学校(後の旧制天王寺中学校)は、自宅から東へ約2キロメートルの上町台地上にあった。6年間往復したこの通学路が、折口少年の心と与えた刺激は計り知れない。台地の西方には夕陽が沈む海が広がり、東方には河内・高安の里へ続く俊徳道が走り、その先には信貴の峰、二上山、葛城・金剛の山々が連なる。自ずと古代へと誘われていく眺望だ。

この通学路には、もう一つ大きな特徴があった。折口は『自選年譜』で「江戸時代以来の貧窮街、長町裏・又は合邦ヶ辻(図3)、家隆塚と伝へる夕陽ヶ丘・勝曼院・巫子町を」通ったと振り返っている。台地の坂を上り下りし、都市の周縁に生きる、多様な人々

れびと」は、遠来の神であることもあれば、ご先祖様であることもあれば、「ほかひびと」や「巡遊伶人」と呼ばれた流浪の芸能者たちも含まれた。町や村を巡りながら、家々を祝福して回る門付けの芸や、寺社の境内などで行われた説経節や講談や落語や俄(にわか)、相撲や浄瑠璃などさまざま。それらの超越的な聖性を宿すと同時に、差別にもさらされた「ほかひびと」や「巡遊伶人」たちに、折口はとりわけ深い眼差しを向け、文化の周縁に置かれてきた彼らの営みを、文化史の基層にしっかりと位置付けて評価した。

国文学者で國學院大學教授の上野誠氏は著書『折口信夫「まれびと」の発見』(幻冬舎、2022年)のあとがきで、次のように折口を評している。「常にこの人は、アンチの道を選ぶ人なのだ。常に、マイノリティーの立場から、反発する心で学問をしている人なのである。(中略)短歌創作でも、主流のアララギ派とは、途中で決別した。神道研究で

も、けっして主流ではなかった。民俗学でも、柳田國男を思慕しつつも、柳田の方法とは正反対の方法を取った。官学に対しては、私学の立場から発言した。また、性的にもマイノリティーであった。常に、下位者や弱者、マイノリティーの立場に立って、上位者や強者に対して、恨む心で学問をしてきた人なのだ。」間違いなく、その感性や思想の土壌は、幼少期・少年期の大阪での経験によって耕された。折口学の種を宿している。折口の独創のスピリッツこそ、「野生」の都市・大阪の賜物と言ってよいだろう。折口が大阪で暮らしたのは、生まれてから18歳までと、東京の國學院大學に進学・卒業後、一時帰阪し大阪府立今宮中学校の嘱託教員を務めた23歳から26歳まで。人生の過半は東京で暮らし、國學院大學を拠点に研究や創作に取り組んでいる。しかし、前述の茂吉への手紙でも「わたしは都會人です。併し、野性を深く遺傳してある大阪人であります。」と明言するほど、大阪人の

DNAを強く意識していた。折口が可能性を見出そうとした大阪の「野生」とは、常に生々流転し、聖俗、貴賤、新旧……、異なるもの、流れるものを「まれびと」として受け入れることによって、新しい文化を生み出す風土である。社会の分断が際立つからこそ、必要とされる都市の在り様だ。さて、当連載を締めくくりに当たって、折口も幼い日におそらく目にしたであろう、中世の歌人・西行が大阪の原風景を詠んだ歌を記しておく。「津の国の難波の春は夢なれや 蘆のかれ葉に風わたるなり」。新古今和歌集では冬の歌とされ、枯れ果てた世界を強調する解釈が一般的だが、「西行物語絵巻」では春の詞書とともに描かれている(図5)。書誌学者・日本文学者で生粋の大阪人でもあった肥田皓三氏(1930-2021)は、このびょうびょうたる冬枯れの蘆の景色の向こうに、早春の明るい日が差してきらきらと光る海の景色を展望された。その姿勢



図5『西行物語絵巻』から、鎌倉時代に西行法師(1118-1190)が上町台地を通った際、難波の広大な蘆原に心動かされ詠んだとされる歌「津の国の難波の春は夢なれや 蘆のかれ葉に風わたるなり」の場面(国立国会図書館デジタルコレクションより)。



図4『上町台地 今昔タイムズ』Vol.19 (2023年 春夏秋冬号) 2面。左の二次元コードから、紙面の閲覧ができる。

が暮らす世界を横断して、自宅と学校の間を行き来する。日々の経験から得た視座は、後の芸能論や「まれびと」の概念に深く結びついている。

今昔タイムズVol.19では、折口少年の通学ルートを設定しているオダサク倶楽部代表の高橋俊郎氏に「上町台地と折口信夫の原風景(少年折口信夫が歩いた跡を訪ねて)」について解説いただいた(図4)。とりわけ高橋氏は、「若

き折口にとって、特に印象的だった光景があった」として、「それは、上町台地の西方に陽が沈む荘厳なる光の風景で、私には、これが彼の思想形成にも大きく影響しているのではないかと思えます。折口の唱えた概念のうち、主なものに『山中の他界』と『西方の常世』の二つがあります。両者共に沈む夕陽と関係するイメージでした。前者は小説『死者の書』にも描かれた山

越阿弥陀や當麻曼荼羅に、後者は西の海の彼方にある他界『常世』に、それぞれつながる考え方でした。」と述べている。

おわりに「まれびと」と生々流転の風土

折口は、常世(他界)からやってきて、幸福をもたらす来訪神としての「まれびと」と人々の関係の在り様に、日本文化の特性を捉えた。「ま

こそ、「野生」の都市・大阪の未来を拓くものであり、混迷の時代に光を見出す地であると、「まれびと」の声が聞こえてくるようだ。

- 注
- *1 『上町台地 今昔タイムズ』のバックナンバーは、大阪ガストネットワーク(株)エネルギー・文化研究所のホームページで公開している。なお、Vol.19の参考文献は同紙の1面下に記載。 https://www.og-cel.jp/project/ucno/even2_kon.html
 - *2 『上町台地 今昔フォーラム Document』のバックナンバーは、今昔タイムズと同じホームページで公開している。
 - *3 説経「しんとく丸」では、高安長者の子・しんとく丸が継母の呪いによって宿病に侵され、絶望の淵に陥るが、四天王寺を重要な舞台に、許嫁の乙姫の献身的な愛と観音の靈力に救われ、最後は父とともに河内国高安に帰ることができるとある。
 - *4 上町台地 今昔フォーラムVol.19「大阪のお地蔵さん」に学ぶ、まちと暮らしの今昔物語」は2017年9月10日(日)に開催。田野登氏による基調講演のテーマは「大阪のお地蔵さん」の歴史・民俗を紐解く。『上町台地 今昔フォーラム Document』Vol.19に収録、今昔タイムズと同じホームページで公開している。
 - *5 初出は『アララギ』第十一巻第六号(1918年6月)。
- ひろもと・ゆかり
大阪ガストネットワーク(株)エネルギー・文化研究所研究員。住宅建築専門誌「新住宅」編集員等を経て、1992年から大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(CEL)研究員。歴史・生活・文化の視点から、都市居住やコミュニティの持続的発展につながる情報発信等に取り組む。共著に『大阪新・長屋暮らしのすすめ』一地域を活かすつながりのデザイン―大阪・上町台地の現場から(ともに創元社)、共編著に『コミュニティデザイン新論』(さいはて社)など。